

●「松山額 静養」



静養

松山老人 識

書の意味【心身をゆったりと休めること 識しるす】

●「京友禅 鳳凰柄風呂敷」 昭和初期



●「松山一行軸」



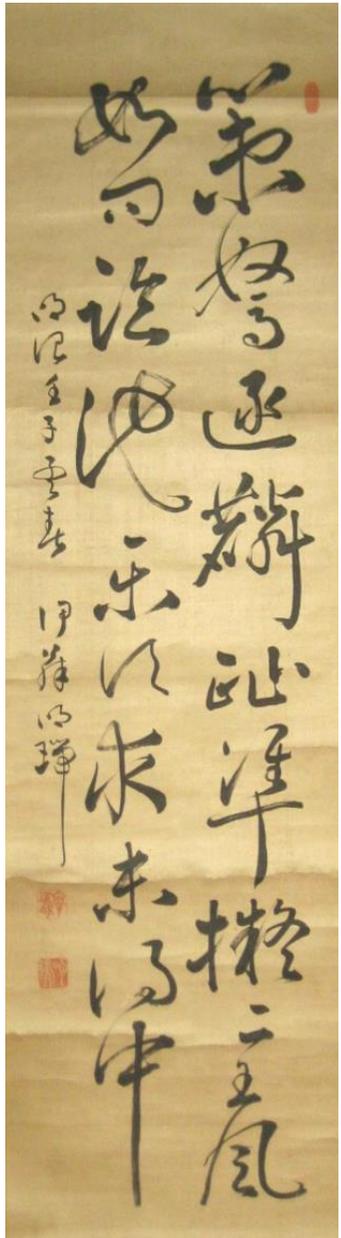
情得古稀壽 (きとくこきじゆ)

乙亥(きの)のとい 昭和十年) 元旦 試筆準盲生 入古稀壽 松山老人 識
書の意味【七十歳の古稀を寿ぐ 識しるす】

初代吉田茂平 号松山。慶応二年石川郡山島村安吉に吉田家十五代 八郎右衛門の子として生れる。家業は酒屋、酒屋(白山酒造)、質屋業などを営む大地主であった。山島村からの年貢米三百石を筆頭に、石川郡、能美郡、金沢方面からの年貢米は、実に一千石もあったという。

明治三十三年に、吉田銀行を松任町殿町に創設し、地元安吉、美川、鶴来、小松、金沢にも支店を置き、馬銭と称する貨幣を発行するほど対外的に信用があった。山島村村長も務め、大正元年、現在の松任ふるさと館に転出し、倉庫業、運送業にも手を伸ばし、更に朝鮮まで進出して一大興業会社を設立した。昭和十一年、七十歳にて死去。

●「明瑞二行軸」



策駑逐磷政(趾心)準擬二一王風

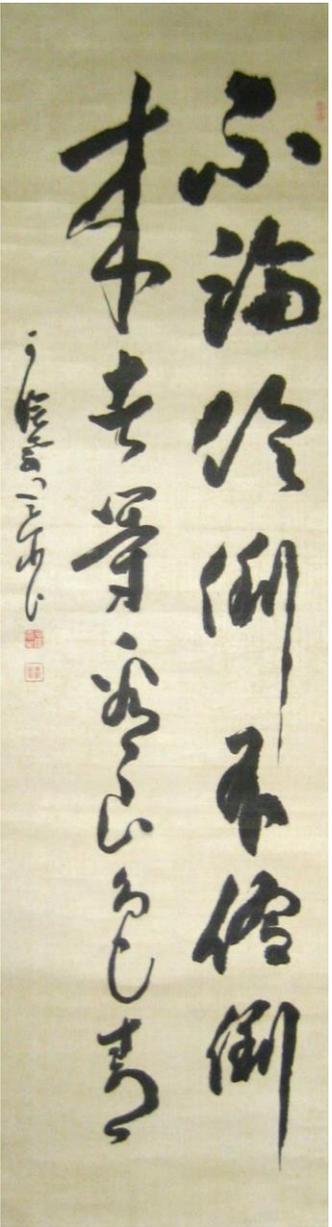
如雨論池樂頃求未得中

明治壬子(みずのえね明治四十五年) 雪春 伊藤明瑞

伊藤明瑞(めいずい) 書家。本名は宮本正雄門(まさおと) 明治二十二年、和歌山市生れ。

明治二十四年、二歳で漢学者南海鐵山に入門し、明治二十五年、元堺県知事に揮毫を披露。早くから神童・天才書家と呼ばれ、幼くして古典を暗記するなど博覧強記な人物であった。明治二十七年、五歳で王羲之の書法を体得し、免許皆伝書を授与される。明治二十八年、明治天皇の御前で腕前を披露し、「日本明瑞」の名を賜る。後に伊藤博文の書生となり、「伊藤明瑞」を名乗るようになった。青年期から没するまで明石市に居住する傍ら、皇族・華族や全国の官公庁・寺院・学校などを回って、実演を披露した。昭和二十三年、明石の自宅において死去。五十九歳。

●「不論伶俐之書」



不論伶俐不偽倒

来去等看正色青

可睡齋主

秋野孝道(こうどう) 仏教学者、曹洞宗僧侶。曹洞宗大学(現・駒澤大)学長。總持寺貫首、曹洞宗管長。号「大忍」。黙照・円通禪師・可睡齋主

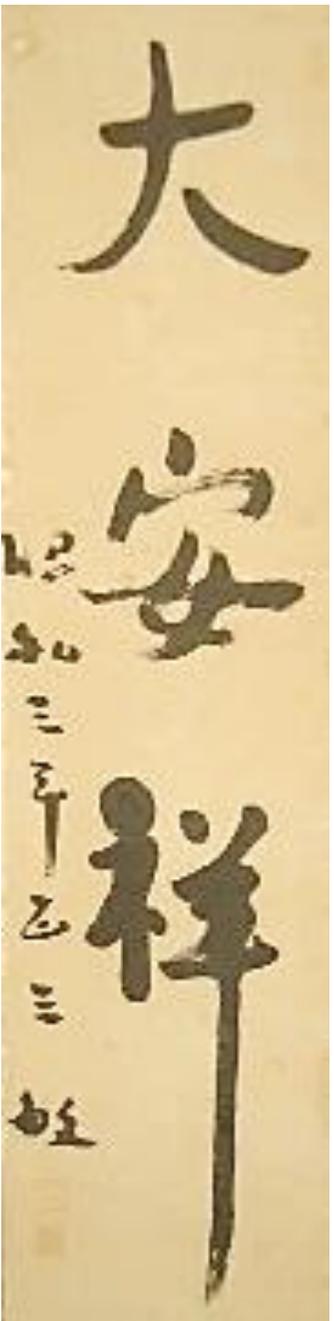
安政五年、遠江国(現・静岡県)にて三男として生まれる。「正法眼蔵」を研究。

明治四十二年母校・曹洞宗大学(駒澤大学)学長に就任。

昭和四年總持寺貫首、翌年曹洞宗管長。晩年、東京帝国大学で「正法眼蔵」の特別講座を開催。

昭和九年、七十七歳で死去。

●「大安祥」 暁鳥敏筆



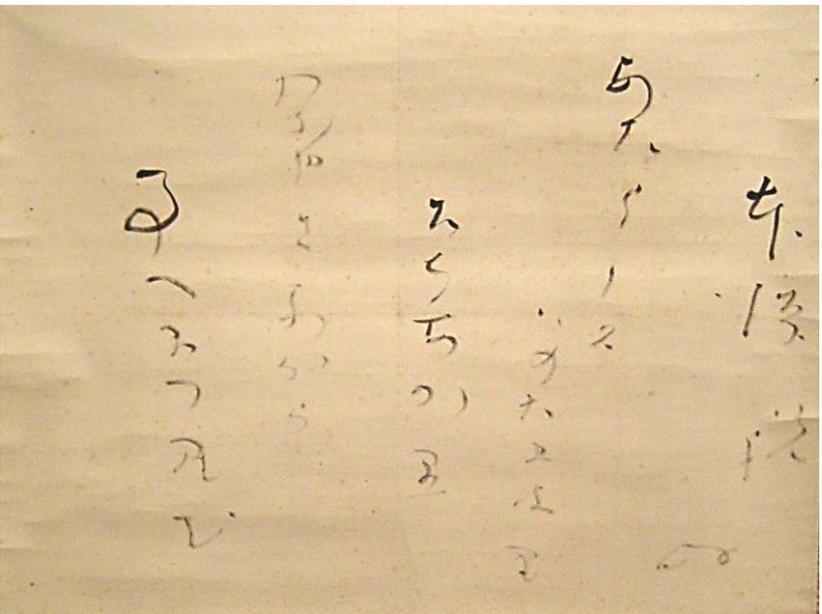
大安祥 (だいあんじょう)

昭和三年 正三 敏

書の意味【大変静かに落ち着いているさま】

敏が昭和三年正月の三日、五十一歳の書

●「和歌 本復祝」 暁鳥敏筆



本復祝 敏

あたらしく

いのちたまわり

たちあがり

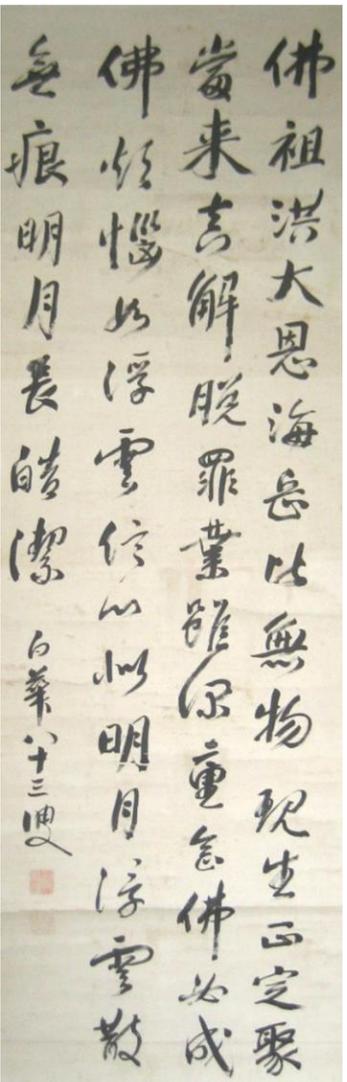
わかやぎながら

つかえまつらん

暁鳥敏 (あけがらすはや) 思想家・宗教家

明治十年、北安田の明達寺に生まれ、京都の大谷中学校、真宗大学を卒業後、師である東京の清澤満之のもとで浩々洞を共に創設。ここで月刊誌『精神界』編集の中心となり、当時の思想界に大きな影響を与えた。また、ゲーテ、ソクラテス、日本書紀、古事記等も広く研究し、国内はもとより朝鮮、インド、ヨーロッパ、中国、アメリカなど各地を行脚した。多くの著書を残すとともに、歌人としても知られ「十億の人に 十億の母あらんも 吾が母に まさる母ありなんや」は有名である。昭和二十九年、七十八歳にて死去。

●「白華四行軸」

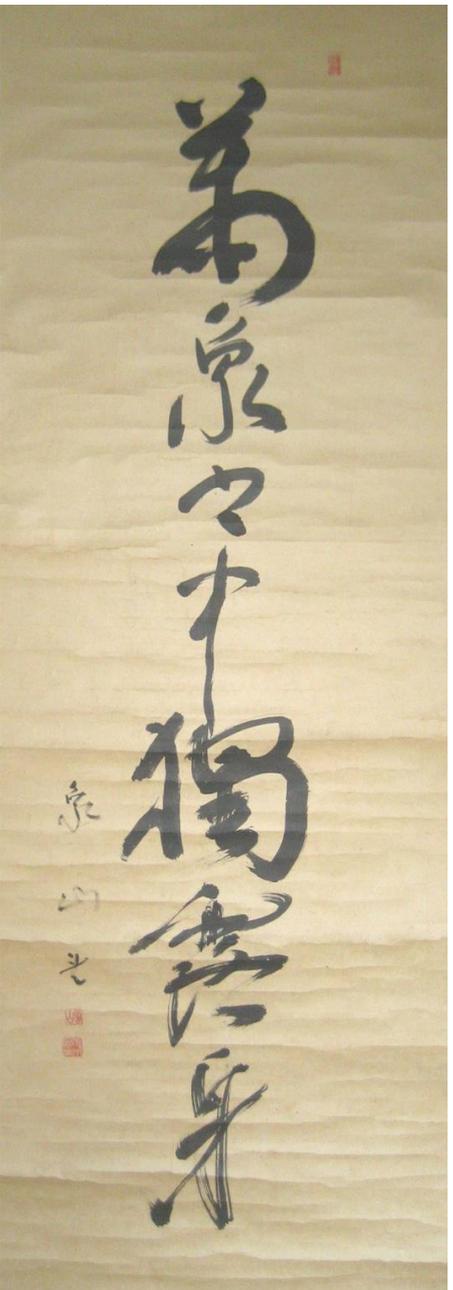


仏祖洪大恩 海岳比無物 現生正定衆 當來真解脫
罪業雖深重 念佛必成佛 煩惱如浮雲 信心似明月
浮雲散無痕 明月長清潔 白華 八十三叟

書の意味【仏祖の恩は広大で、海山に比べようもない。罪深くとも念仏すれば必ず成仏できる。煩惱は浮雲のようなもので、信心は明月のように清らかである。】

松本白華 本誓寺 住職 天保九年に、東一番町の本誓寺に生れる。十三歳の頃、大阪で広瀬旭荘に漢籍を学ぶ。ヨーロッパ、インド等へ宗教視察に赴き、東本願寺外国布教係として、中国へ渡る。漢学・詩学・和歌を好み、書は書家の間でも高く評価された。大正十五年、八十九歳で死去。

●「象山一行軸」



萬象乃中獨露身 象山書

書の意味【世の総ての物の中にあつて、自分はただ露の様にはかない身である。地位も名誉も財も空しいもので、唯々真心を以て生きるべきである。】

佐々木象山 知気寺 三寶院住職。

明治四十年、石立町 諦了寺に生まれる。元、帯広大学学園短大学長。

● 「花鳥之図」 忒碓（蕪城秋雪）筆



蕪城秋雪（かぶらきしゅうせつ）南画家。天保十一年、松任中町に永井太兵衛の次男として生まれる。儒者の三宅橘園の後を継ぎ、三宅松碓（しょうたい）と名乗る。安政の頃、京に出て東山義亮に学ぶ。本名を沖、通称を捨次郎、二郎。雅号を松碓、秋雪、心華居士、玄對閣主。晩年、加賀藩前田斉泰に仕え「蕪城」の姓を賜り秋雪と号した。諸国を遊歴し、明治三十九年、甲府にて六十七歳で死去。

● 「寿老」 阿閉芸崖（雲崖）筆



阿閉雲崖（あとしうんがい）（芸崖）は、明治十三年十月三十一日、吉郎の長男として松任の中町で生まれる。先に雲崖と号するが、後に芸崖に改めている。金沢の四条派の垣内雲嶙や松任の梶野玄山に学び、隣家の染色業 春田屋で友禅染に従事していた。

日露戦争従軍後の明治三十九年に妻と上京し、狩野派の橋本雅邦に学び、友禅染職人としても活躍した。三笠宮家興入れの婚礼衣装も染めたと伝えられる。しかし、関東大震災と戦時中に全てを失い松任に帰郷する。

現存する絵画はその頃に作られたものが多い。昭和二十八年、七十四歳で死去。

● 「老松富貴」 梶野玄山筆



梶野玄山(かじのげんざん) 絵師 明治元年、松任町生まれ。名は定吉、雅号は玄山。十三歳で金沢の四条派垣内右隣に学び、三十一歳で京に出て、鈴木松年に師事。真宗京都中学で七年間、絵画科教師を勤める。花鳥図を得意とし、中でも孔雀図を多く描いた。昭和十四年、七十一歳で死去。

● 「紅葉」 遠阪桃水筆



遠阪桃水